

令和 5 年 5 月 20 日現在

機関番号：32682

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19H04370

研究課題名(和文) 現代中東における政治と宗教 「アラブの春」以降のムスリム同胞団を事例に

研究課題名(英文) Politics and Religion in the Contemporary Middle East: A Study on the Muslim Brotherhood after the 'Arab Spring'

研究代表者

横田 貴之 (YOKOTA, Takayuki)

明治大学・情報コミュニケーション学部・専任教授

研究者番号：60425048

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、「アラブの春」以降のムスリム同胞団を事例に、中東地域の政教関係の変容を解明した。中東諸国の同胞団は弾圧によって組織存亡の危機にあり、彼らが主張する「イスラーム的改革」は頓挫した。他方、各国の政権は依然として同胞団に対する脅威認識を保持し、イスラーム主義の再台頭を警戒している。同胞団に代表されるイスラーム主義は低迷しているが、依然として当該地域の政教関係を規定する重要な構成要因である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、ムスリム同胞団の低迷を理由にイスラーム主義を等閑視するのではなく、現地調査・資料解析による実証的分析に基づくイスラーム主義研究・中東政治研究を再始動させたことである。また、社会的意義としては、「イスラーム国」の台頭以降に顕著となったイスラームとテロリズムを同一視する言説を相対化することで、地域の実情に即したイスラーム理解による異文化理解・多文化共存の促進に貢献した。

研究成果の概要(英文)：This research project explores the transformation of relations between politics and religion in the contemporary Middle East, focusing on the Muslim Brotherhood after the 'Arab Spring.' The MBs in the region have been in crises of organizational survival due to repression, and the "Islamic reforms" they advocated were thwarted. On the other hand, the regimes in the Middle East remain aware of the threat to the MBs and are concerned about a reemergence of political Islam. Islamism, as represented by the MB, is in the doldrums but remains essential in defining relations between politics and religion in the region.

研究分野：中東地域研究

キーワード：現代中東政治 イスラーム主義 地域研究 社会運動研究 思想研究

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

### 1. 研究開始当初の背景

20世紀以降、イスラーム主義運動は中東政治の主要アクターとして政治と宗教の関係を強く規定してきた。「アラブの春」後のイスラーム主義運動の政治的成功・挫折は、政治と宗教の関係という「古くて新しい問い」が21世紀の中東に根強く存在することを示した。特に同胞団は中東最大のイスラーム主義運動として重要な研究対象であった。しかし、2013年以降、同胞団の実態解明を目指す実証的研究が停滞し、重要な研究対象である同胞団に関する研究の空白が生じた。しかし、中東諸国で同胞団が一定の動員力・支持者を現在も有していたことに鑑みれば、さらなる研究発展が望まれていた。こうした当時の状況に対して、本研究プロジェクトは次の2つの問題を特に重視した。

第1に、「アラブの春」という政治変動を経た同胞団の変容が解明されていないという問題。「アラブの春」は、直後の政治的台頭などの成功だけでなく、ムルシー政権崩壊や湾岸諸国での非合法化などの挫折（2013年以降）をもたらした。同胞団の変容解明には、成功・挫折の両局面の分析が不可欠であった。しかし、挫折に関する研究はほぼ進展がなく、「アラブの春」での成功・挫折で大きく変容した同胞団の現状は不明のままであった。そのため、各国同胞団の思想・活動・組織構造や各同胞団間の国際ネットワークの実態解明が喫緊の課題であった。

第2に、同胞団の実態解明が不十分なため、「アラブの春」を経た中東地域における政治と宗教の動態的關係を分析できないという問題があった。中東最大のイスラーム主義運動である同胞団の理解を欠いたままでは、中東政治とイスラーム主義の関係を的確に論じられなかった。時は政治的挫折を理由に同胞団を等閑視・矮小化する傾向も顕著であった。中東政治での同胞団の影響力に鑑みれば、挫折をも含めてその政治的帰結を客観的に分析する必要があった。

### 2. 研究の目的

本研究プロジェクトは中東地域で同胞団研究に従事する研究者が協働し、①「アラブの春」を経た中東地域におけるムスリム同胞団の思想・活動・組織構造と国際ネットワークの変化、②「アラブの春」で同胞団が中東の各国・域内政治へもたらした政治的帰結、③「アラブの春」後の中東地域における政治と宗教の關係の変容の実態、について論究することを目的に発足した。

当研究プロジェクトが3年間（コロナ禍による繰越承認を受けて最終的には4年間）の申請期間中に解明を目指したのは、次の3点であった。

- (1) 中東5ヶ国（エジプト、シリア（情勢により渡航不可の場合はレバノン・トルコ）、ヨルダン、クウェート、カタル）の同胞団を対象に、聞き取り調査を中心とする現地調査、一次資料収集・解析を行い、活動・思想・組織構造の実態を解明する。
- (2) (1)の成果を踏まえ、各国同胞団の活動実態を比較分析することで、各々の独自性と共通性を検討する。各国同胞団の相互関係や域内政治への関与・役割の分析を通じ、国際ネットワークの現状を把握する。
- (3) (1)と(2)を踏まえ、比較政治学と社会運動研究の知見・理論を参照し、同胞団が各国・域内政治へもたらした政治的帰結を分析し、「アラブの春」以降の中東地域における政治と宗教の關係の実態と変容を解明する。同時に、中東地域と他地域との比較検討により、現代中東に固有な政治と宗教の關係を明らかにするとともに、政治的帰結をめぐる諸理論に関する検証作業を行う。

### 3. 研究の方法

上述の学術的背景・研究目的を念頭に、具体的には中東各国での同胞団の実態解明、各国同胞団の比較分析・国際ネットワークの解明、政治的帰結の分析・理論的検証と政治と宗教の關係に関する論究を遂行するため、研究会や現地調査を行い、国内外での研究発表、各種講演会、論文・図書などの刊行、国際ワークショップの開催などによって研究成果を発信した。

<2019年度>

初年度は、各国同胞団の思想・活動・組織構造の実態を解明するために、各メンバーが現地調査・文献調査を進めるとともに、その研究成果発表を行った。

代表者の横田は、中東・欧州在住の同胞団員・関係者とのメール・SNSによるインタビュー調査、文献・資料研究を継続した。2020年3月に予定していたトルコ・欧州出張が新型コロナウイルス感染拡大で中止となったが、それを補う情報収集が可能であった。研究分担者の末近は、レバノンでの現地調査を行い、資料収集とインタビューを実施した。分担者の吉川は、文献・資料研究を中心にヨルダン同胞団の研究を進めた。分担者の石黒はクウェートで湾岸諸国の同胞団に関する現地調査を実施した。研究会を単独・共催にて計4回適宜実施した。

主な研究成果発表については、ギリシャでの地中海学会（Mediterranean Studies Association）、セルビアでの中東欧国際政治学会・米国際政治学会合同大会（CEEISA-ISA Joint international Conference）などの国際学会で代表者と分担者（吉川・末近）が報告した。その他、当該研究課題に関する論文刊行、台湾での国際シンポジウムや日本比較政治学会など国内外での報告を行った。

<2020 年度>

2020 年度は、各国同胞団の比較分析、および域内での活動・国際ネットワークの実態解明を目指した。しかし、コロナ禍のため海外出張は困難となり、現地調査を断念せざるを得ず、研究活動に支障が生じた。コロナ禍において、研究代表者（横田）・分担者（吉川・石黒・末近）とも、オンラインツールや SNS を活用した同胞団員・関係者らとのインタビュー調査と文献調査によって研究を継続した。また、研究会を単独・共催にて計 3 回実施した。

主な研究成果発表については、代表者の横田は『国際安全保障』の特集『『イスラーム国』後の中東地域における安全保障』の責任者となり、同胞団の安全保障化に関する論文を発表した。吉川も論文を同特集で発表した。

<2021 年度>

2021 年度もコロナ禍による制限が続いたが、オンラインツールを活用しつつ文献調査を中心に前年度同様に研究活動を継続した。特に、中東各国・地域内での同胞団の政治的帰結分析と理論的検証、中東での政治と宗教の関係の実態・変容の解明に注力した。代表者・分担者（吉川・石黒・末近）は同胞団・イスラーム主義運動に関するオンラインでのインタビューや文献調査を継続した。研究会を単独・共催にて計 4 回実施した。

また、主な研究成果発表として、当研究プロジェクトの研究成果の中間報告的な位置付けで、代表者と分担者（吉川・末近）は地中海学会（Mediterranean Studies Association）のオンライン年次集会（ジブラルタルで対面同時開催）で研究発表を行った。他にも、当該研究課題に関する論文刊行、日本中東学会・世界政治学会（IPSA）など国内外での報告を行った。

<2022 年度>

2022 年度は繰越研究費によって、オンラインを活用しつつ海外出張を再開した。横田がトルコ・フランスでの現地調査を実施し、同胞団員・関係者・有識者とのインタビューを行い、一次資料の収集を行った。フランスからイスラーム主義研究者の S. ラクロワ氏（パリ政治学院）を招聘し、国内 3 ヶ所（東京・京都・広島）で国際ワークショップを開催した。研究会を単独・共催にて計 5 回実施した。

主な研究成果発表として、リスボンでの地中海学会（Mediterranean Studies Association）年次集会において、横田が責任者を務めるパネルを開催し、分担者（末近・吉川）が発表した。また分担者の石黒は北米中東学会（MESA）で発表した。各自が調査結果に基づき、論文・書籍を刊行した。他にも、当該研究課題に関する論文刊行、台湾など国内外ワークショップで報告した。

#### 4. 研究成果

本研究プロジェクトの成果は、研究代表者・分担者がそれぞれの分担に応じた研究成果を国内外学会での発表、研究論文・図書の刊行、各種講演などによって既に公表済みである。期間中にコロナ禍による制限があったものの、当初の目標を十分に達成することができたと考えている。研究プロジェクト発足当初の研究目的に照らし合わせると、おおむね次のとおりとなる。

まず、中東 5 ヶ国のムスリム同胞団に関する活動・思想・組織構造の実態解明については、対面・オンラインでのインタビューを中心とする現地調査、およびアラビア語一次資料の収集・解析に基づいて取り組んだ。2013 年以降の中東各国において同胞団は体制による弾圧に直面し、組織解体の危機に陥っていた。しかし、既存団員による地下・在外での活動継続、さらには古参団員に反発する若手団員による「新たな同胞団」の模索が明らかになった。組織として堅固な構造を失いつつも、「潮流（タイヤール）」として社会に根ざした活動を継続しており、必ずしも政治的役割の終焉した運動体とみることには適切ではない。

次に、各国同胞団の活動実態を比較分析、および各々の独自性・共通性の検討については、各国同胞団に関する理解を基礎に、生存戦略が各国同胞団単位で遂行されるのに伴い、国際同胞団を基礎とする同胞団間の一体性よりも、各国における独立性が重視されている現状が明らかになった。無論、パレスチナ問題など共通性を指摘できるが、各々の政治状況に大きく規定される各国同胞団の独自性が目立った。また、組織の一体性よりも個人単位の紐帯、さらには創設者ハサン・バンナーなどの思想に基づく精神的連帯が強まっている。

最後に、比較政治学と社会運動研究の知見・理論の参照、同胞団が各国・域内政治へもたらした政治的帰結の分析については、中東各国の政治体制とイスラーム主義に関する理解を起点に、「アラブの春」後の中東諸国・中東地域において同胞団がもたらした政治的帰結を考察した。その際、代表者・分担者は、権威主義体制による同胞団の「安全保障化（securitization）」や民主化や社会運動の諸理論を手掛かりに、同胞団の主導してきたイスラーム主義の挫折を明らかにし、それに伴う同胞団における新たなイスラーム主義の模索や同胞団以外のイスラーム主義者・運動によるイスラーム主義の再構築の諸動向を明らかにした。そして、中東地域の政教関係においてイスラーム主義が依然として重要な規定要因であることを示した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計17件（うち査読付論文 7件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 横田貴之	4. 巻 48(1)
2. 論文標題 エジプトにおけるイスラーム主義の安全保障化 スィーサー体制によるムスリム同胞団対策を中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国際安全保障	6. 最初と最後の頁 60-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計20件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 17件）

1. 発表者名 横田貴之
2. 発表標題 Paving a Uncharted Course: The Crisis of the Muslim Brotherhood and Changes in Egyptian Politics
3. 学会等名 22nd Annual Mediterranean Studies Association International Congress（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 横田貴之
2. 発表標題 「アラブの春」から10年 中東政治と中東政治研究の現在
3. 学会等名 日本中東学会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 YOKOTA Takayuki
2. 発表標題 Securitizing the Muslim Brotherhood: In Pursuit of Stability in Egypt under al-Sisi 's Rule
3. 学会等名 Mediterranean Studies Association（国際学会）
4. 発表年 2021年

## 〔図書〕 計11件

1. 著者名 Mohammed Moussa and Takayuki Yokota	4. 発行年 2022年
2. 出版社 I.B. Tauris	5. 総ページ数 312
3. 書名 Larbi Sadiki and Layla Saleh eds., Covid-19 and Risk Society across the MENA Region: Assessing Governance, Democracy, and Inequality	

1. 著者名 横田貴之編・中村寛監修	4. 発行年 2023年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 259
3. 書名 エジプト(シリーズ「中東政治研究の最前線」第4巻)	

## 〔産業財産権〕

## 〔その他〕

-

## 6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	吉川 卓郎  (KIKKAWA Takuro)  (30399216)	立命館アジア太平洋大学・アジア太平洋学部・教授   (37503)	
研究分担者	石黒 大岳  (ISHIGURO Hirotake)  (30611636)	独立行政法人日本貿易振興機構アジア経済研究所・地域研究センター中東研究グループ・研究員   (82512)	
研究分担者	末近 浩太  (SUECHIKA Kota)  (70434701)	立命館大学・国際関係学部・教授   (34315)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	見市 建 (MIICHI Ken)  (10457749)	早稲田大学・アジア太平洋研究科・教授  (32689)	
研究協力者	塩崎 悠輝 (SHIOZAKI Yuki)  (00609521)	静岡県立大学・国際関係学部・准教授  (23803)	
研究協力者	宮地 隆廣 (MIYACHI Takahiro)  (80580745)	東京大学・総合文化研究科・教授  (12601)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関